

# 夜搜

隠れ里

## 序章

<sup>み き さん</sup>  
御棺山に父が消えてから既に三日が経つ。

連日大勢の人々が捜索にあたっているにも関わらず、見つかったのは泥まみれになった登山靴と、愛用のストックのみだった。<sup>ながあめ</sup>長雨で湿った大量の落ち葉に、半ば埋もれたような状態で発見されたという。

それらがあった場所が場所だけに、俺は正直諦めかかっていた。

登山靴とストックが発見されたのは、山の八合目から程近い西門谷<sup>さいもんだに</sup>の谷底らしい。山に慣れていた父ならば、よほどの事が無い限り絶対に寄り付かないはずの場所。付近の地面は当時雨のせいで非常にぬかるんでおり、父はそれに足をとられて転落したのではないか……というのが、警察の見解だった。しげとみ食堂の三十インチテレビときたら、先程からそのニュースばかり流して俺を幻滅させるのだ。

「こりゃあちよつと厳しいな」

何処からかそんな声がした。俺はしかめっ面をしたまま黙っていた。お冷を注いだばかりのプラスチックのコップを持ち上げ、一気に中身を飲み干すと、氷が夏らしい涼しげな音を立てて鳴った。

やるせない心を見透かしたかのように、おっちゃんが厨房から頭だけ出して言った。

「雄二君も捜索隊に加えてくれって、今朝<sup>わたせ</sup>渡瀬のじじいに頼んどいたから」

「……あ、はい。ありがとうございます」

無駄だと思っけどな。

そんな減らず口を叩きたい気持ちを抑え、俺はへらへらと笑って感謝の言葉を述べた。

胸の奥では何か熱いどろどろしたものが渦巻いていた。

唯一の肉親である父が消息を絶ったというのに、俺は山に入れてもらえなかった。自警団と志願者を中心に<sup>きゅうきよ</sup>急遽結成された捜索隊の名簿にも、「<sup>なかのゆうじ</sup>中野雄二」の四文字は無かった。

実質的なリーダーである御年七十歳の渡瀬さん曰く、「まだ若過ぎて迷惑がかかる」からだそうだ。十六歳という年齢が一団にもたらす影響が果たしてどれだけあるのか、俺には良く分からない。

毎日、この食堂に情報を集めに来る事しか出来ない少年を気の毒に思ったのか、おっちゃんは昼飯をただで食わせてくれるようになった。他人から受ける親切とはこんなにも温かいものかと感動すら覚えたが、俺はただただ「ありがとう」と繰り返す事しか出来ず心苦しかった。返せぬ恩はかえって辛く感じたりするものだ。

「しげとみ食堂」はこの村唯一の村民交流所的な役割を果たしていて、捜索隊の連中も頻度の差こそあれ皆ここに立ち寄っていく。新しい情報が欲しければ毎日ここに来れば良い、というわけだから、俺は開店時間である朝九時から閉店時間の夕方五時まで居座っている。食堂の大将であるおっちゃん公認の<sup>いそうろう</sup>居候のような立場だ。

本日五杯目となるお冷<sup>ひや</sup>をもらいに席を立つと、新しい番組

が始まった。ローカル局が毎日二時間余りかけて流している、バラエティーだかニュースだか分からない内容のやつだ。

トップニュースとして登場したのはやはり「御棺山で男性一人が遭難か」だった。同じ局が流している同じ事故のニュースだから、目新しい情報等まず無いに決まっている。分かっているけど食い入るように画面を見てしまう自分がいる。

「県警の発表によると、今年二十四日日曜日の夜七時頃、A県B市奥曾根村の男性三人による登山グループのメンバー中野義雄さん五十歳が、登山中だった同村の御棺山八合目付近で消息を絶ったという事です。下山した登山グループのメンバー二人は、『大雨が降りだしそれ以上登れなくなったので、岩陰で寝袋やビニールシートにくるまって暖をとった。しばらくして、中野さんは用を足してくると言ってから一人でその場を離れた。そのまま三十分余り経っても帰ってこないで付近を捜したが見つけられず、やむなく下山した』と話しており、警察は中野さんが遭難した可能性が高いと見て捜査しています」

またそれか。

「……また、本日午前七時ごろお伝えしましたとおり、中野さんが履いていたものと思われる茶色の登山靴と、登山用ストックが、御棺山西門谷にて発見されました。これらはいずれも……」

俺は隣の客からテレビのリモコンを拝借して、チャンネルを次々に変えていった。しかしどこの局でも、やっているのは同じような内容の番組ばかりだった。先んじて新たな情報を伝えているような所は一つとして無かった。それでもボタンを押すのをやめられない。

液晶画面を凝視したまま無言で立ちつくす俺の姿を、周囲の人々は憐れみとも同情ともつかぬ瞳で見つめていた。